松江市における畳空間の使われ方と今後の方向性

正岡　さち*・久常　智子**

Sachi MASAOKA and Tomoko HISATSUNE

The Present Conditions and the Direction of Tatami-spaces of Houses in Matsue-City

ABSTRACT

⑴ 対象住宅のほとんどに畳空間が設置されており、さまざまな用途使用されていた。

⑵ 畳空間に対する重視点は、全体的に見ると「やすらぎ」「使い勝手のよさ」が多かった。しかし、若年層ではデザインや伝統など様式的な点を、高齢層では実用性を求める傾向がある等、年齢によって異なることが明らかとなった。

⑶ 畳空間の設置希望は非常に高く、その理由としては実用的側面と文化的側面が多かった。若年層は従来の和室のイメージ、中年層では実用性、高齢層ではデザイン性や文化面とともに実用性が理由であった。また、女性は実用的側面、男性は文化的側面からの理由が多かった。

⑷ 今後の日本の住宅における畳空間は、部屋として残ると考えている人が多く、今後も部屋として畳空間が残っていくと考えられていた。しかし、若年層と男性に畳空間が住宅から消えると考えている層があること、また、30歳代以下の若年層と女性に畳空間はより洋風化していくと考えていることも明らかとなった。

⑸ 以上のことから、今後もしばらくは畳空間は住宅内に設置され続けるものの、より洋風化していくことが予想され、さらには畳室のない住宅も増加していくものと推測され、置き畳の需要が増えていくものと考えられる。

【キーワード：住宅，畳，意識，方向性，調査】

Ⅰ．緒言

日本の住宅は書院造の様式を受け継いだもので、畳の部屋に床の間・障子といった意匠が伝統的なスタイルである。その中でも特に、床材として使用されている畳は日本住宅の象徴と言っても過言ではない。しかし、明治以降洋風化が進み、現在では住宅内は洋室が大半を占め、その中に畳を床材とする和室は１室か２室設ける形式の住宅がほとんどになった。また意匠面でも、洋室との相性を考えた現代風のもの、コンクリートやアルミ等の新素材を使用した新和風のもの、集合住宅に多く見られるシンプルなもの等、現代の生活様式とともに畳空間は変化してきている。[1) 2)]

これまで畳空間に関する研究は、今井、伊東らによる「居住者意識からみた畳空間の動向」[2)] のほか、園田、神谷、中右らによる「戸建て住宅における続き間の形態と使われ方に関する研究」[3)] で畳空間の位置やその使われ方に関する研究がなされてきた。それらの調査研究から、若年層においては愛着意識が薄らいでおり、必要性も低くなっているため、畳離れが進行しつつある状況であり、実際に畳空間を持たない住宅も出てきているということ、しかし依然居住者の畳空間に対する愛着意識は強く、日本の住空間において昔からの特徴である続き間も形を変えながら残っていることがわかっている。また、その利用の仕方も接客・行事などのあらたまった場としてよりも家族が利用する、くつろげる場としての希望が高いこと[4)]、洋間との相性を考えた新しいデザインの畳空間が求められていることが明らかになっている[7)]。さらに、国嶋らの研究によると[8)]、学生は畳空間に格式を求め、主婦は実用性を求めていることが明らかになっている。これらの研究から、今後求められる畳空間像の相違は、年代の違いだけでなく、生活歴や嗜好性の違いなど、さまざまな原因が考えられる。その違いは何によるものなのか探りながら、住要求に応じた畳空間を提案していくことが今後の課題として挙げられる。

本研究では、日本の地方都市である島根県松江市の住宅における畳空間の現状や今後の畳空間に対する意識の傾向を把握することによって、畳空間のあり方に及ぼす影響要因と今後望まれる畳空間を探ることによって、住要求に合った畳空間を提案する資料とすることを目的とする。

その結果、若干の知見が得られたので報告する。

Ⅱ．調査概要

調査方法は、質問紙によるアンケート調査、調査対象は18歳以上の男女とし、アンケートは直接配布および直接回収である。

*　島根大学教育学部人間生活環境教育講座
**　元島根大学教育学部学生

調査期間は、平成17年９月下旬～10月下旬、配布部数は320部、有効回収部数218部、回収率68.1％である。

居住者の畳空間に対する意識は人によって異なるため、調査は個人を対象として行うことにした。

調査内容は、現在居住している住宅の畳空間の概要、今後の畳空間に対する意識などである。

Ⅲ．調査結果および考察

１．対象者の属性と住宅の概要

（１）対象者の属性

対象者の属性を表１に示す。性別は男性45.4％、女性54.4％である。年齢は20歳代が最も多く、平均年齢は39.1歳である。家族構成は核家族が41.3％、三世代家族が37.6％であった。同居人数は４人が25.7％と最も多かった。

表１　調査対象者の属性

性別	男 99(45.4)　女 119(54.6)
年齢	20歳未満 15(6.9)　20代 78(35.8)　30代 23(10.6)　40代 36(16.5)　50代 27(12.4)　60代以上 38(17.4)　不明 1(0.5)
職業	会社員 46(21.1)　公務員 19(8.7)　農林漁業 4(1.8)　自営業 9(4.1)　自由業 2(0.9)　パート 25(11.5) 専業主婦 24(11.0)　内職 2(0.9)　学生 63(28.9)　無職 20(9.2)　不明 4(1.8)
家族構成	夫婦のみ 31(14.2)　核家族 90(41.3)　三世代家族 82(37.6)　不明 15(6.9)
同居人数	２人以下 41(18.8)　３人 32(14.7)　４人 56(25.7)　５人 35(16.1)　６人以上 46(21.1)　不明 8(3.7)

（　）内は％

（２）住宅の概要

住宅の概要を表２に示す。

築年数は10年以上が22.9％で最も多く、平均築年数が27.9年と、古い住宅が多かった。住宅形態は一戸建てが多く87.6％を占め、所有形態も持家が86.2％であった。

延床面積は100㎡以上150㎡未満が22.5％と最も多く、平均は131.1㎡であった。住宅の部屋数は３～５ＬＤＫが半分を占めていた。

表２　住宅の概要

築年数	10年未満 39(17.9)　10年以上 50(22.9)　20年以上 44(20.2)　30年以上 31(14.2)　40年以上 15(6.9) 50年以上 6(2.8)　60年以上 3(1.4)　70年以上 15(6.9)　不明 15(6.9)
住宅形式	一戸建て 191(87.6)　集合住宅 20(9.2)　不明 7(3.2)
所有形態	持家 188(86.2)　借家 19(8.7)　不明 11(5.0)
延床面積	50㎡未満 9(4.1)　50㎡以上100㎡未満 22(10.1)　100㎡以上150㎡未満 49(22.5) 150㎡以上200㎡未満 28(12.8)　200㎡以上 14(6.4)　不明 96(44.0)
部屋数	2ＬＤＫ以下 10(4.6)　3～5ＬＤＫ 112(51.4)　6～8ＬＤＫ 53(24.3)　9ＬＤＫ以上 21(9.6)　不明 22(10.1)

（　）内は％

２．現在居住している住宅の畳空間の概要

（１）設置状況

現在居住している住宅における畳空間の設置状況を表３に示す。

95％以上で畳の部屋か畳コーナーがあり、ほとんどの住宅に畳空間があることがわかる。畳の部屋数は３～５部屋が47.2％と最も多い。これは、調査対象に古い住宅が多かったためと考えられ、本調査の対象者は、普段から畳空間に馴染みが深い者が多いと推測される。

畳空間の利用状況は、「個人の空間」としてのみの利用は8.7％であるのに対し、「家族全員が使う空間」としてのみの利用は２割強、「両方」の用途での利用は６割強で、両方を合わせると８割以上を占めており、畳空間は家族全員が利用する傾向が強いことがわかる。畳空間の用途は、「居間」「客室」が同率で56.0％で最も多かった。

表３　畳空間の設置状況

有無	ない 5(2.3)　部屋がある 206(94.5)　コーナーがある 15(6.9)　不明 5(2.3)
部屋数	2部屋以下 67(30.7)　3～5部屋 103(47.2)　6～8部屋 28(12.8)　9部屋以上 9(4.1)　不明 11(5.0)
畳コーナーの数	2箇所以下 10(4.6)　3箇所 2(0.9)　4箇所 1(0.5)　5箇所以上 2(1.0)　コーナーなし 203(93.1)
畳空間の利用状況	個人の空間 19(8.7)　家族全員が使う空間 49(22.5)　両方 134(61.5)　不明 16(7.3)
畳空間の用途	居間 122(56.0)　食事室 23(10.6)　予備室 50(22.9)　家事室 13(6.0) 客室 122(56.0)　その他 47(21.6)　不明 33(15.1)

（　）内は％

（２）利用実態

図１に畳空間での生活行為を示す。

図中の破線より上の生活行為は日常的生活行為であり、下は非日常的生活行為である。「家族の就寝」が62.4％と最も多く、「接客」「客の就寝」と続く。個人的生活行為である「家族の就寝」を除くと、日常的生活行為よりも非日常的生活行為に利用される割合が高い傾向にあった。

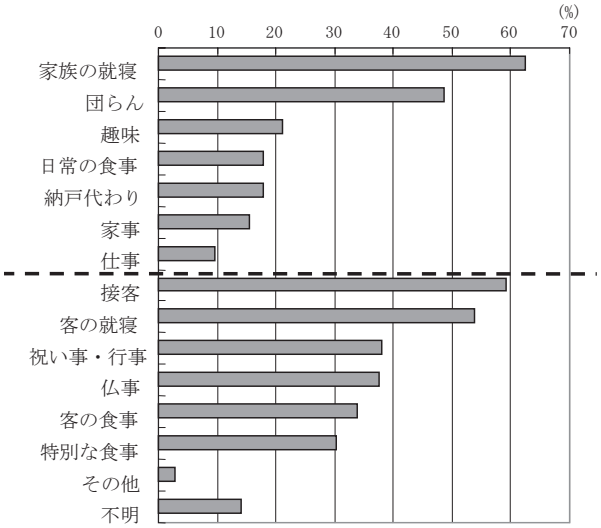

図１　畳空間での生活行為

３．畳空間に対する意識

（１）畳空間に対する重視点

畳空間に対する重視点について複数回答で答えてもらった結果、全体では「やすらぎ」が77.7％で最も高く、次いで「使い勝手のよさ」「自然素材の良さ」「さまざまな用途への使い道」等であった。

これを、年代別に見たものを図２に示す。年代が高くなるにつれて、「使い勝手のよさ」「さまざまな用途への使い道」「広さ」を重視する割合が高く、一方、「伝統」「デザイン」「格式」「維持管理のしやすさ」は、年齢が低い程重視する割合が高い傾向にあった。また、「自然素材のよさ」は30歳代に突出して多く、この世代が幼児を持つ世代であることを考えると、子育てとの関連から重視しているのではないかと推測される。

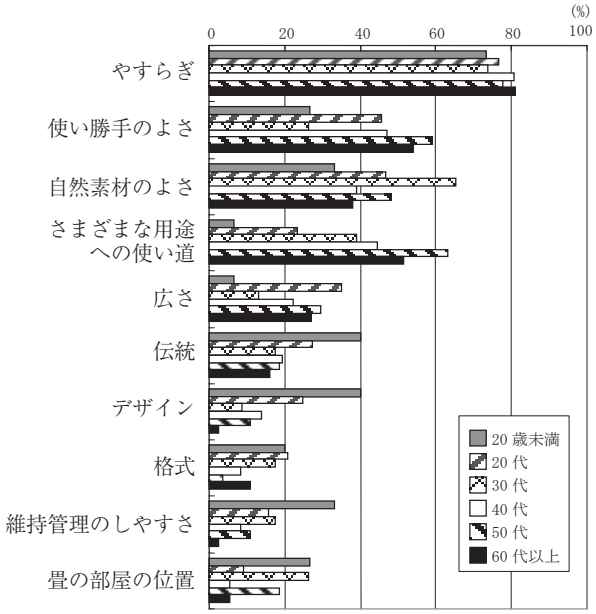

図２　畳空間における重視点（年代別）

年代とともに外見や様式的なものから実用性を重視するようになっていくと考えられ、生活者として住宅を主体的に管理する等の立場の違いや生活歴・畳空間の使用歴・使用率等の影響ではないかと考えられる。

また、男女別に比較すると、男性より女性が多くの重視点を選ぶ傾向にあるものの、年齢ほどの差は認められなかった。

（２）今後の住宅への畳空間設置に対する希望とその理由

今後住宅を建てるとした場合の畳空間設置に対する希望を尋ねたところ、95％以上が「作る」と答えており、「作らない」はわずか4.2％であり、畳空間設置希望率は非常に高かった。

次に、畳空間を作りたい理由について尋ねた結果を図３に示す。

全体では「じかに寝転がることができるから」「感触がよいから」など、いぐさを使用した畳そのものの長所をとらえた回答が多かった。一方、「普段からよく使うから」「いろいろな用途に使えるから」「家族に使いたい人がいるから」といった実用面の理由も多かった。

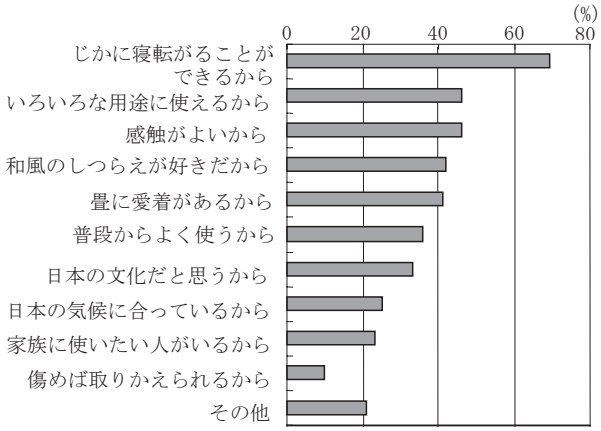

図３　畳空間を作りたい理由

図４に年代別にみた結果を示す。

「いろいろな用途に使えるから」「家族に使いたい人がいるから」は年齢が高くなるに従って高くなる傾向にある。「和風のしつらえが好きだから」「普段からよく使うから」「畳に愛着があるから」「日本の気候に合っているから」は30～40歳代の層で低くなっている。また、「じかに寝転がることができるから」若年層と高齢層に低い傾向にあった。

若年層は畳に対して実用性よりもしつらえや文化・気候対応といった一般的に言われている和室のイメージが理由としてあげられており、中年層になると、実用的な側面を理由としてあげる傾向にある。さらに、高齢層では、デザイン性や文化面とともに実用性も含めた理由をあげており、畳空間を多面的に評価する傾向にあることが伺えた。

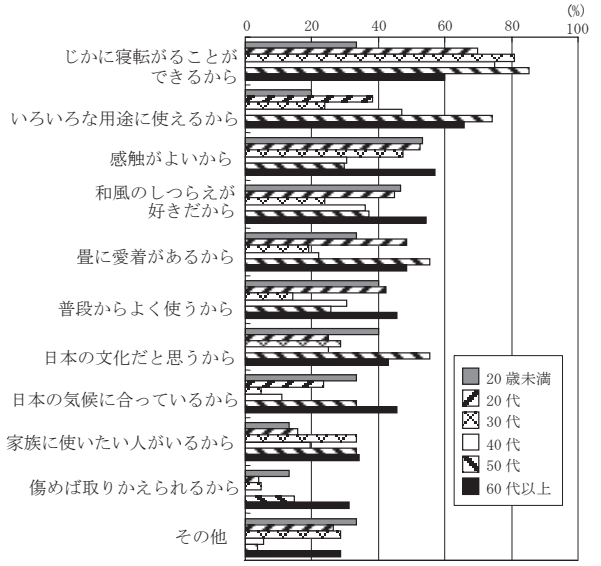

図４　畳空間を作りたい理由（年代別）

図５に、男女別に見た結果を示す。

女性で高い割合を示したのは「普段からよく使うから」「いろいろな用途に使えるから」であり、男性では、「日本の文化だと思うから」「畳に愛着があるから」であった。

女性は実用的な側面から、男性は文化的側面からの理由が多いのが特徴であるといえよう。

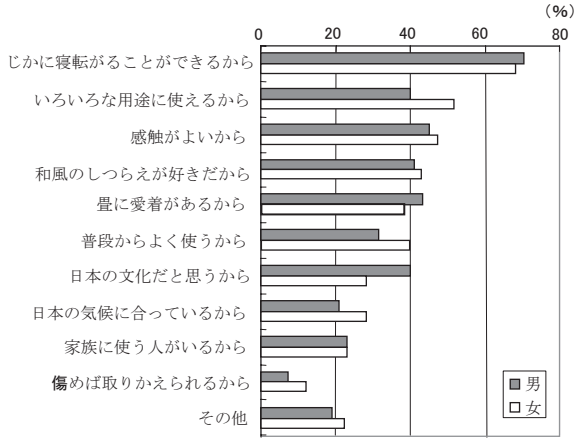

図５　畳空間を作りたい理由（男女別）

（３）今後の日本の住宅における畳空間の方向性に対する意識

今後の日本の住宅における畳空間の方向性に対する意識について尋ねたところ、全体的には「伝統的なかたちの部屋として残る」が約５割を占めており、「洋風に合う雰囲気の部屋として残る」と合わせると約７割の人が部屋として残ると考えている。また、「残らない」とした者はごくわずかで、多くの人が今後も部屋として畳空間が残っていくと考えている。

図６に年代別に見たものを示す。

30代では、「洋風に合う雰囲気の部屋として残る」が45.5％と最も高くなっている。実際に住宅を建てるのもこの年代が多く、使い勝手や住み心地を考えた上での結果であることが推測される。40代以上になると、再び「伝統的なかたちの部屋として残る」が最も高くなっている。40代では、その反面「残らない」との回答も見られ、長年畳空間を使用してきた上での不要であるという判断が伺える。50代では、「洋風の部屋にコーナーとして残る」が24.0％と最も高く、伝統を大切にしている反面、畳コーナーという新しいかたちを受け入れる年代であることがわかる。

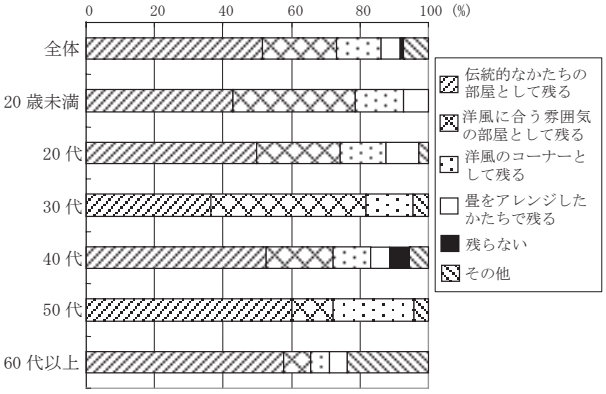

図６　今後の日本の住宅における畳空間の方向性に対する意識（年代別）

全体的に、年齢が高くなる程、「伝統的なかたちの部屋として残る」と考えている傾向にある。30歳代以下で、「洋風に合う雰囲気の部屋として残る」が多く、特に、住まいづくりが現実のものとして捉えられる年代である30歳代では半数近くがそう考えている結果となった。また、20歳代以下では、部屋としてではなく「畳をアレンジしたかたちで残る」が他の年代より高く、実質的に空間として残らないと考えている層がいることが伺えた。60歳代以上で「その他」が多いが、記述に「予想できない」「分からない」と書いている人が目立ったことから、様々な畳空間があるため、予想困難な人が多かったものと推測される。

これを男女別に比較したものを図７に示す。

男女ともに伝統的な形の部屋として残ると考えている者が多かったが、女性に「洋風に合う雰囲気の部屋として残る」「洋風の部屋にコーナーとして残る」が高くなっている。一方、男性には、女性より「畳をアレンジした形で残る」「残らない」と答えている人が多かった。このことから、男性より女性に今後はより畳空間の洋風化が進んでいくと考えていること、男性の一部に、畳空間はなくなっていくと捉えている層がいることが伺えた。

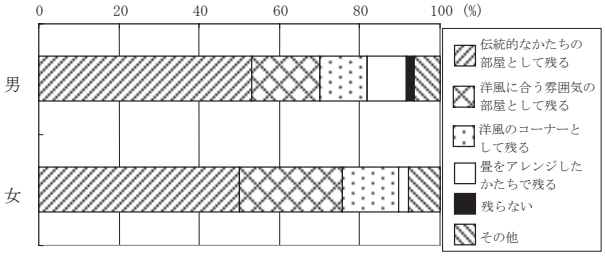

図７　今後の日本の住宅における畳空間の方向性に対する意識（男女別）

Ⅳ．要約

住宅における畳空間の現状と今後の畳空間に対する意識調査の分析を行ったところ、下記のような結果が得られた。

（１）対象住宅のほとんどに畳空間が設置されており、さまざまな用途に使用されていた。

（２）畳空間に対する重視点は、全体的に見ると「やすらぎ」「使い勝手のよさ」が多かった。しかし、若年層ではデザインや伝統など様式的なものを挙げていることに対して、高齢層では実用性を求める傾向にあり、年齢によって異なることが明らかとなった。

（３）畳空間の設置希望は、非常に高かった。その理由として、実用的な側面と文化的側面からの理由が多かった。若年層はデザイン性や文化面といった従来の和室のイメージが、中年層では実用性が、高齢層ではデザイン性や文化面とともに実用性も含めた理由をあげていた。また、女性は実用的な

側面、男性は文化的側面からの理由をあげる人が多かった。

（4）今後の日本の住宅における畳空間の方向性に対する意識については、「伝統的なかたちの部屋として残る」、「洋風に合う雰囲気の部屋として残る」と合わせて約7割の人が部屋として残ると考えていることから、今後も部屋として畳空間が残っていくと考えられていた。しかし、若年層と男性に「畳をアレンジしたかたちで残る」「残らない」が多く、畳空間が住宅から消えると考えている層があることが明らかとなった。また、30歳代以下の若年層とと女性に畳空間はより洋風化していくと考えていることも明らかとなった。

以上をまとめると、若年層や男性では畳空間に伝統や様式的なものを求める傾向があるが、高齢層や女性では実用性を求める傾向があったことから、主体的に生活を経営していく立場になると、実用性を求めるようになるものと考えられる。また、同様に、若年層と男性に畳空間が消えていくと考える人が多い傾向にあり、それは、畳空間に求めるものの違いによるのではないかと考えられる。すなわち、畳空間に伝統や様式を求めると、畳空間が洋風化していった結果なくなっていくと考えるものと思われる。一方、畳空間に実用性を求める場合、洋風化はするものの畳空間の転用性の高さという点から、洋風化した形で畳空間が残っていくと考えていると推測される。これらのことから、畳空間というより、床材としての畳が評価されているのではないかと考えられる。

以上の結果から、今後もしばらくは畳空間は住宅内に設置され続けるものの、より洋風化していくことが予想され、洋室と並べても違和感のない畳空間が設置されていく割合がますます高くなると考えられる。床材としての畳の評価は高いことから、縁のない琉球畳風の畳を設置した空間が増えるとともに、畳空間がない住宅が増加するにつれて、必要に応じて敷くことが可能な置き畳の需要が増えていくものと推測される。

引用文献

1）伊東理恵、今井範子：「現代性をとり入れた畳空間デザイン―畳空間の構成要素別にみた―」、日本建築学会大会学術講演梗概集、p.51～52、日本建築学会（2000年）

2）国嶋道子、竹原広美：「住宅雑誌に見られる畳空間の空間構成に関する研究」、日本インテリア学会第10回大会研究発表梗概集、p.67～68、日本インテリア学会（1998年）

3）伊東理恵、今井範子、中村久美：「居住者意識からみた畳空間の動向―注文住宅における―」、日本建築学会大会学術講演梗概集、p.201～202、日本建築学会（1998年）

4）園田眞理子、神谷園子、中右令子：「戸建て住宅における続き間の形態と使われ方に関する研究」、日本建築学会大会学術講演梗概集、p.93～94、日本建築学会（1999年）

5）今井範子、伊東理恵、中村久美：「接客・行事空間としての畳空間の検討―注文戸建住宅における―」、日本建築学会大会学術講演梗概集、p.197～198、日本建築学会（1998年）

6）川村道乃、今井範子、伊東理恵：「住宅平面における畳空間の動向―首都圏の注文戸住宅における―」、日本建築学会大会学術講演梗概集、p.47～48、日本建築学会（2000年）

7）ハウジング企画社：「居心地のいい和風暮らしを楽しむ家」、p.88～89、主婦と生活社（2004年）

8）三代恵理：「住宅における畳空間の方向性」、島根大学卒業論文（2004年）

9）国嶋道子、竹原広美：「個人差・属性が空間評価に及ぼす影響―和室の空間構成の視覚的効果に関する実験的検討・２―」、日本インテリア学会第12回大会研究発表梗概集、p.41～42、日本インテリア学会（2000年）